

土佐のわらべ

第373号 《第395回（2012. 6. 14）子どもの本の読書会記録》参加者5名・文書参加4名

『星の林に月の船 声で楽しむ和歌・俳句』 大岡信／編 岩波書店

編者 大岡信さんは 朝日新聞の長期連載「折々のうた」で知られていると思いますが、詩人であり、評論家であり、翻訳家でもあります。そんな大岡さんが、万葉の昔から現代まで、それこそ星の数ほどある和歌・俳句の中から194作を選んで時代順に配列したのが、この「星の林に月の船」です。

「声で楽しむ和歌・俳句」という副題がついているように、改めて読み返しますと、五七調の心地よさやことばの響きに、新鮮な驚きと感動があります。

本のタイトルになっている「星の林に月の船」は、柿本人麻呂歌集の「天の海に雲の波立ち月の船 星の林に漕ぎ隠る見ゆ」からとっています。

「天は海。雲はその海に立つ波。三日月の船がそこを滑って星の林に漕ぎ隠れてゆく。……日本の古代詩歌で、これほど見事に天空の豊かさを幻想的にえがいた歌はほかに見当たりません。(本文より)」

まさに、そのとおりでと思います。千年を超えてなお、新鮮さを失わない言葉の力と美しさにただ驚くのみです。

この本が課題に決まった時、読書会のメンバーから、日常あまり短歌や俳句の本は読まないけれど（過去の国語の授業を思い出して）読めるかなあと、不安な声が出ていましたが、まったくの杞憂に過ぎませんでした。時代が違っても日本人の感性は変わってないのだなあと感じます。

この本のすごいところは、どこからでも読めること。時代順に並んではいるものの、順番に読む必要はまったくありません。そして何度でも読み返せること。読むたびに違う発見があるような気がします。

一人ひとり心に残る歌は違うでしょうが、その中でも、読書会の複数のメンバーが目にした歌がいくつかありました。

例えば、「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」(古今集) いわずと知れた『君が代』の原歌です。

また、江戸時代に詠まれた「男の死霊聞分けがよき」(武玉川) など。思わず笑ってしまいますが、納得するような、したくないような……。

「憂きことを海月に語る海鼠かな」(黒柳召波) など、なんともユーモラスで、その光景が見えるようです。

どの一言も精選され、他に変えることができません。少ない言葉でこんなにも豊かに心を表現できる日本語の表現の面白さと深さを改めて感じます。

「たのしみは 本の中にてそれぞれの たくさんの戸を開くひととき」P144の橘曙覧の独楽吟を読んで参加者が作った歌です。「たのしみは……とき」あなたも作ってみませんか？

どの作品もルビがついており、簡単な解説もついているので、分かりやすく読める本です。

(S. K)